

5歳児を対象としたオンライン表現活動の実践

～[誕生日ー1年に1回の私の特別な日ー]～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

池末留奈・糸山憲汰郎・井上鈴奈・
江崎直美・小坂大悟・佐田美怜・
富松一華・堀之内結衣・芳野瑠理・
塩崎恭太

行った表現活動：劇

劇名：「もりのレストラン」

配役：キツネくん（糸山憲汰郎）、キツネくんの母（芳野瑠理）、ウサギさん（井上鈴奈）、リスさん（池末留奈）、ブタさん（富松一華）、コックさん（小坂大悟）、コックの奥さん（佐田美怜）、ネズミさん（塩崎恭太）、ナレーション及び撮影（堀之内結衣）、BGM（ピアノ演奏：江崎直美）

担当：台本（小坂大悟・富松一華）、衣装（井上鈴奈・池末留奈）、小道具（堀之内結衣・塩崎恭太）、カメラ・音（江崎直美・佐田美怜）、報告書（糸山憲汰郎・芳野瑠理）

1. 表現テーマ「誕生日」

最初に表現テーマを決める中で、「卒園を控える子ども達にメッセージを贈りたい」という意見が出た。また、「小学生になっても、思いやりのある子でいてほしい。人にやさしくしてほしい」という声も出た。では、「優しい」とはどういう事だろうか。本校の「保育人間学」の講義において『幸せのものさし』というお話を聞いたことをヒントに、「一人ひとり違っていい。一人ひとりが特別な存在」というメッセージを贈りたいと考えた。しかし、それをダイレクトに伝えても難しいのではないかと考えた。何か、もっと身近にあるもので表現できないかと考えたところ、発表会担当の先生方から、「一人ひとりちがうものといえば、誕生日ではないか」というアイデアを頂き、誕生日をテーマにした発表することを決めた。

（小坂）

2. テーマ「誕生日」について

誕生日のルーツやどのような表現にするかを考えた。まず、最初に昔、日本では元旦になると国民全員が年をとることになる（数え年：注1）ことを調べた。しかしこれは、子どもたちに表現するにあたり、サブテーマである「みんな違ってみんないい」を伝えるには、複雑になってしまうと考え、今回は見送った。次に、誕生日と言えば誕生日ケーキやプレゼント、誕生日会をするといった洋式の様式が一般的だが、そもそもケーキを食べる風習はどこから来ているかを調べた。古代ギリシャの人々は、月の女神アルテミスの誕生を祝うために祭壇をつくり、ケーキを焼

いてお供えした。また個人の誕生日としては、15世紀のドイツで「キンダーフェスト」という子どもの誕生日会が行われ、ケーキにローソクを灯し、それをみなで切り分けて食べるという習慣があった。この時に使われるローソクは、それぞれ意味合いが変わってきており、古代ギリシャの人々は星の光をあらわすためにケーキにローソクを挿し、ドイツでは子どもを守る魔除けの炎として使われていた。（注2）誕生日を表現することにおいて、誕生日ケーキは現代の日本においては欠かせない風習になっており、子どもたちに誕生日について表現するうえでも、分かりやすいアイテムだと考え、上記で調べたことを何らかの形で生かしたいと考えた。

次に、誕生日をテーマにするにあたり、その言葉が持つイメージや意味を考えた。元々は「ケーキやプレゼントがもらえる」というイメージが強かった。だが、本校の「保育人間学」の講義を経て、その見方が変わった。「なぜ生まれてきたのか」という疑問から、生まれたいという意味と生まれさせたいという願いとそして縁とのタイミングの成就により、偶然でなく生まれるべくして生まれてきたいのちであること。そうした背景から誰もが等しく、かけがえのないものであること。

「私」として生まれ、周りから「生まれてきてよかったね」と祝福されること（注1）を知り、そういった誕生日のありがたさを子どもたちに伝えたいと思った。

以上を踏まえ、誕生日を子どもたちに表現するには、どうしたらいいかと話し合った結果、その背景を伝えるにはストレートに説明するような形よりも、物語を通して伝える劇が向いているのではないかという結論になった。

注1) 宮原昭夫公式サイト「横丁の隠居をめざす作家」（<http://art.upper.jp/miyahara-akio/unchiku/uzukitakare/60.html>）

新誤字用語辞典「数え年」（http://www.breaking-news-words.com/2020/08/blog-post_19.html）

注2) バースデーギフト「誕生日ケーキの起源・由来！誕生日はいつから祝い始めた？」（<https://www.birthday.gift/birthdaycake-birthday-origin/>）

exiteニュース「誕生日ケーキの起源は？なんでロウソクを立てるの？【暮らしの雑学】」（https://www.excite.co.jp/news/article/Karapaia_52218726/）

注3) 社団法人大谷保育協会『真宗保育のカリキュラム入門』21頁

(小坂)

3. 発表にあたって大切にしたこと

今回の遊びと表現発表会は、コロナウイルス感染拡大を防ぐためオンラインで行われた。大学側と保育園側をビデオで繋ぎ、ライブ中継という形式だった。そこで、どのようなことを大切にしていたのかまとめていく。

【昨年までの発表会スタイル】	【今回の発表会】
○講堂で発表する	○各教室で発表する
・会場が広く、その場に学生・保育者・子ども達がいる	・教室の広さで行う ・カメラ越しに子ども達や保育者がいる

・照明や背景でより一層華やかな演出ができる	・カメラの調整、背景の制作なども自分たちで行う
・身振り手振りを大きくする	・カメラに映る範囲で、調整しながら行う
・大きな声ではっきりとゆっくり話す	・音割れを防止するために大勢で大きな音を出さない
・1年生が幕間を行う	・今年は2年生のみで導入から行う
・ほとんど発表者側の演出のみである	・子ども達も参加できるような内容にする

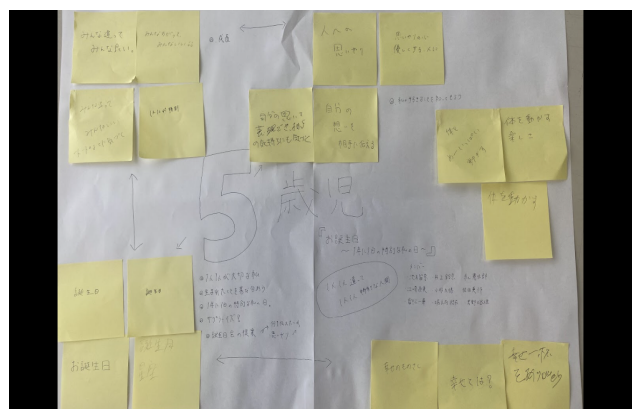
このように、昨年と今年とでは大きな変化があった。カメラ越しであっても、私達は子ども達に伝えたいことを話し合い、どのように表現すると理解しやすいのか、動きやセリフは適切であるかなど、試行錯誤を積み重ね1つの作品を創りあげることが出来た。オンラインということ子ども達とより近い距離(環境)で発表できたと思った。

(芳野)

4. 内容について

(1) ストーリーの説明

私たちのグループでは、まず何よりも台本の作成を急ぐことからのスタートだった。「誰が何を担当するか、何を作らなければならないのか、購入物は何か」などの漠然としたものに方向性を出すため、ストーリーを考えて台本を作る必要があ



る。ストーリーから作成された台本で、必要なものをみんなでアプローチしていく流れを作ろうとした。一番にそこ着手したため、その他の準備では余裕を持って行動することができた。以上の実体験から、劇においてストーリー及び台本の作成は、発表会の準備の進行そのものを左右すると思われる。実際のストーリーはテーマやサブテーマ、誕生日について調べたことを踏まえて、お誕生日会を題材にしたものを考えた。劇中の主人公は、見る子どもたちが自身を投影することを考え、誕生日を祝われる立場の方が分かりやすいだろうと、今日が誕生日の子どもにした。森のクックさんは、誕生日に欠かせないケーキを作る人だった。だが、グループでの意見で、造形で実際に本物のケーキを作りたいという案があった。誕生日について調べた時のハニーケーキや、バースデーケーキなどは作成が難しい。では、ケーキをパンケーキにすることで、このパンケーキを劇中に動物たちが協力してデコレーションすれば、より物語で誕生日をみんなで祝おうとする雰囲気は伝わるのではないかという意見になり、それを話にいれることにした。以上の流れから森のクックさんは、知らない（関係性が薄い）人でも誕生日と聞けば祝うなど、誕生日の尊さを表現するキャラクターとして重要な人物となった。親しみやすさを考慮し、作中の登場人物はすべて動物で演じる案も出た。そこから「主人公」「森の動物たち」、「クックさん」、「パンケーキ」というキーワードによって、下記の内容が作成された。

(小坂)

(2) 内容

森の奥でキツネくんの誕生日会があり、キツネくんはみんなからプレゼントをもらって大喜び。キツネくんのお母さんは、キツネくんの好きなものを作ってあげようと、「何が食べたいの?」と聞くと、彼は森のレストランで見たパンケーキが食べたいと言いました。お母さんは困りました。森のレストランは最近できたばかりで、そのパンケーキがどんなものか誰も知らない(補足1)のです。そこでキツネくんは、森のレストランにパンケーキを注文することにしました。



「特別な日だからパンケーキください」注文を受けた森のレストランのクックさんは不思議でした。

「特別な日にパンケーキ? もっと立派なケーキがあるのに」不思議でしたが、注文通りパンケーキを作って、キツネさんの家に持っていきます。そこでクックさんは、キツネくんの誕生日だと知るので。

「年に1度しかない誕生日だから、もっ

と豪華なケーキにしよう」

クックさんはお誕生日会のみんなと協力して、パンケーキを豪華なバースデーケーキにしました。キツネくんはみんなで作ったケーキを喜んで、誕生日に感動します。

お友達は「私もこんな誕生日会がしたい」と羨ましくなります。そこでキツネくんは、お友達の一人ひとりの誕生日も、これからはみんなでお祝いする約束をしました。（補足2）

お友達とみんなで作ったケーキを食べて、楽しくお誕生日会を過ごせたキツネくんでした。（補足）

補足1 ケーキをみんなで作るための伏線と、コックさん以外が知らないことで、子どもたちとやり取りをするきっかけにするため

補足2 キツネくんだけが特別ではなく、お友達も特別であるという表現のため

（小坂）

（3） 台本の変化

以上の内容で作成した台本をグループで見てもらい、台本に合わせて配役（キツネくん、ウサギさんその他）や衣装、必要な大道具（背景など）・小道具（パンケーキ、レストランの看板など）の作成が決まった。台本自体は何度か修正して、印刷しなおすことがあった。台詞合わせの練習の時に、それぞれの役の人が自分の台本に修正を加えていた。それぞれの役がしゃべりやすい言い回しや、自身の演じるキャラクターを考えて台詞を変え、人地一人の台本に変化が現れた。だが、その修正が多くなったり、他の役の人にも周知したい変更もあったりして、それらを修正して印刷しなおすことになった。

また、先生から演技や指導を受ける中でより自然な言い回しや、自分たちが表現したいものについて必要な言葉を追記することもあった。劇中でキツネくんに好きな色を聞くシーンがあり、ピンクと答えるキツネくんに「男なのにピンクなんて…」とお友達が非難し、それを「自分の好きな色が一番よ」たしなめるといったトランスジェンダーに配慮した台詞を追加するなど、人それぞれが違うことを意識させる表現が盛り込まれた。このシーンの追加で、サブテーマの時に話し合われた「一人一人違って、一人一人特別な人間」をより表現することができ、ストーリーとしても厚みが増したように思える。しかし、何度も修正・印刷を繰り返すとその手間や印刷費用もかさむ為、グループで話し合いながら、印刷しなおす場合は慎重に判断した。

（小坂）

（4） 小道具について

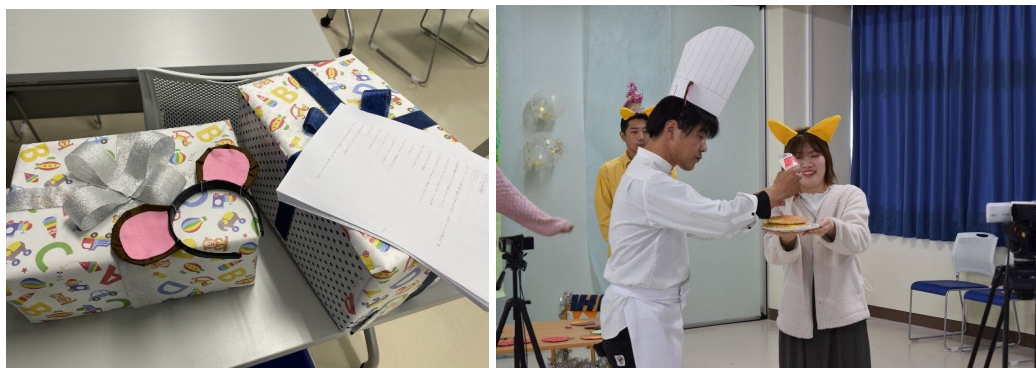
私たちの劇では動物が出てくるため衣装で耳を作った。耳はカチューシャとワイヤー、フェルトで耳の形を作り、ひとつひとつ手縫いを行いなんの動物かわかるよう工夫をした。

また、洋服はその動物に合わせた色のものを個人で着て少しでもその動物に近づけるようにした。



背景はレストラン用と森の奥用と2枚作りカメラの切り替えですぐにその場面に移れるようアイデアを思いついた。また、背景の木を塗る際は本物の木のように見せるため、歯をイメージした塗り方をした。

また、プレゼントやケーキなどを本物ぽくしたかった為、プレゼントは本物ぽくダンボールを飾り付けを行い、ケーキは本物を持ってきて実際に食べている姿を見せようとおもい本物を用意した。



(井上)

(5) ピアノについて

ピアノ

- 「山の音楽家」
- 「お花の赤ちゃん」
- 「もしもコックさんだったなら」
- 「もりのおく」
- 「Happy Birthday」

それぞれのシーンにあった曲選びをしました。劇の始まりには、子どもたちも知っている「山の音楽家」を演奏するなど、親しみのある曲から選び子どもたちの興味を引けるような工夫をしました。



(江崎)

(6) 練習で工夫したこと

今年はコロナウイルスのこともあり、オンラインでの発表ということで、カメラワークや音量調節などにとっても気をつけながら行った。今までの講堂での発表



と違い、教室内で行うことから距離や相手に伝わるボリュームまで考えて行うためとても課題が多かった。場面を変える際などには、フェードアウトや差し替えなどを行い、ピアノの演奏の際には被らないよう静かに調節したりなど些細なことにも注意しながら行った。本番は一発勝負なので、練習の際から細かな微調整を何度も繰り返して準備をした。また、本番ではきちんとカメラの中に入れるよう床に印を付けたり、写ってる姿が分かりやすいような工夫をして本番に望んだ。

(堀之内)

(7) 子どもたちの様子

子どもたちは、何が始まるんだろう。とワクワクしている様子で座っていた。劇が始まると、様々な動物たちが出てきて「○○！」と動物の名前を呼んでいた。劇のお話に夢中になって、静かに姿勢を正して座っている子どもが沢山いた。初めは劇の内容が上手く掴めていなさそうな子どもたちも、どんどんお誕生日会の話なんだ！と気づき真剣に劇を見ていた。

途中、動物の「パンケーキって何か知ってる？どんなのかな？」という問いかけにも、大きい声で「ふわふわ！」や「美味しくて食べられるもの！」など楽しそうに答えていた。

お祝いのシーンでは動物たちや先生と一緒に『ハッピーバースデー』を歌うことで、自分たちもそのお誕生日会にいるような気持ちになれていたのではないかと思う。

劇の終了後には子どもたち同士や先生に「おもしろかったね～」「あの動物さんがね～」と楽しそうに感想を言い合っている様子だった。「もう1回！もう1回！」と、何度も動物さんたちを呼んでいた。

(富松)

リモートが初めてではなかったこともあり、子どもたちはとても集中して見てました。手遊びも一緒にしていて可愛かったです。こんにちはこの掛け声にとっても元気に「こんにちは！！」と返事もしていて嬉しかったです。画面を見て一緒に覗く素振りをしていたので、うまく導入ができたのではないかなと思いました。キツネくんの質問タイムの時に子どもたちも拍手していたりしていたので劇の中の世界に入り込めたかなと思いました。パンケーキの質問した時も、「知ってる！」「丸いの！」と答えてくれる様子が見られたので良かったです。最後あたりの、キツネくんへのお誕生日の歌を歌う時に一緒に歌ってねと呼びかけた所でも元気に「うん！」と返事をしてくれてみんなと一緒にハッピーバースデートゥーユーを歌ってくれていたのもとても嬉しかったです。笑顔で最初から最後まで見て貰えたので良かったです。

(池末)

5. 感想

【小坂 大悟】

私はストーリーや台本を主に担当した。一番感銘を受けたのは、私の作った台本がみんなの力でどんどん変わっていく感覚だった。台本を初めて書いたとき、ストーリーは周りのアイデアをもらっても、実際の台本を作るのは私一人の作業だったので、そのプレッシャーを重く感じていた。しかし、みんなが台本を読んで、すぐに「台詞合わせしよう」と言って、感想や評価より先に、台本の練習を始めてくれたことに驚いた。そこからグループのみんなや指導の先生からの意見ももらい、足りなかった部分を追加したり、より良い表現に修正したりする中で、自分の書いた台本がどんどん良くなっていった。私が新しく追加したいシーンがあり悩んでいると、自然と一緒に考えてくれて「これはもう私だけの台本じゃない。みんなで作った台本なんだ」と思うようになった。劇中ではみんなでケーキを作る。発表会の準備でも、私はみんなと台本を作っていて、劇の外でも劇中の森のクックさんになったような気がした。発表をし終えた感動も大事だが、こういった作品を作るまでに生まれる感動も子どもたちにも伝えていきたいと思った。

【芳野 瑠理】

遊びと表現発表会は、物語の構成、伝えたいこと、グループのみんなと協力することの大切さなど学ぶ場面がたくさんありました。発表を行う対象年齢クラスを決め、年齢に合った発表題材を決めました。なかなか決まらず、先生方にも色々アドバイスをいただきました。たくさん話し合い、テーマが決まってからは役割分担をし各自進めていきました。全体的にほとんどの準備をみんなで行いました。協力することで分からない部分や、もっとこうしたほうがよくなるなど改善点も早く見つけ次回の行動に役立てることが出来ました。オンライン発表だったこそ、子ども達の反応も近くで感じることができたのでよかったと思っています。声の大きさや速さ、カメラを意識した動きなど初めてだったので、難しく感じる部分が多々ありましたがオンラインだからこそその経験ができ良かったと思いました。最初はどうか不安が大きかったですが無事発表ができ、子ども達や学生、先生方と楽しさを共有することができました。このメンバーで1つの作品を創りあげることが出来たことに誇りを感じています。まだまだ課題はあると思いますが保育学生として、ひとりの人間として少しは成長できたのではないかなと感じました。みなさん、ありがとうございました。お疲れ様でした。

【富松 一華】

今回の遊びと表現発表会で「森のレストラン」の劇を行っていく中で、色々な問題や苦勞、そして喜びを班のみんなと分かち合いながら頑張りました。

その中でも私がいちばん大変だと思ったことは、内容作りをしていく場面でした。

最初、中々テーマが決まらずみんな頭を抱えて、考えることもめんどくさくなってしまったりする時期もありました。テーマが決まり、内容を深めていくにつれて

も、「私はこうがいいと思う」「いや、僕はこう思う」「私はこう思う」と意見のぶつかり合いが何度も起こりました。しかし、最終的にはみんなの意見を取り入れた素敵な作品を作ることが出来ました。

この時私は、一つの事を成すにしても、衝突がある。しかしそれを乗り越えることでもっと人と人との中が深まるんだな。と感じました。

この学びは、将来自分が保育者になったときに子どもたちに伝えていくことが出来る学びになったと思います。子どもたちがお互いの気持ちが先走り、喧嘩してしまった時に、「お互いの気持ちを伝え合い、どうその問題を改善していくか、子どもたちに考えてもらう」ということを行うことで、成長につながっていくのではないかと。と思います。

班のみんなと作る時間はとても楽しかったし、子どもたちも喜んでくれてうれしかったです。

【江崎 直美】

5歳児を担当させていただくことになって、来年小学校に上がる子どもたちに対して何をテーマにするのか、また、どうやってそれらを表現すると伝えることができるのか、みんなで話し合いを進めていくと、幅広い様々な案が出たり、ひとつの案もさらに広がっていったりと、内容を深めることができました。また今回は、オンラインを活用するという昨年までとは違う形での発表で、戸惑うことも多くありました。小道具やカメラワーク、立ち位置など、役割分担をしながらどうやったら上手く伝えられるか、練習を繰り返しながら工夫していきました。発表しているときには子どもたちの実際の反応も見ることができ、一生懸命見てくれている姿や「またみたい!」と言ってくれていたことがとても嬉しかったです。限られた時間と環境のなかでしたが、みんなで協力して、私たちなりのひとつの素敵な作品をつくりあげることができたと思います。この経験はこれからも生かしていきたいです。

【堀之内 結衣】

今回の遊びと表現発表会で様々なことを学びました。最初はテーマを決めることからで、みんななかなか案が出ず進みませんでした。1人ずつ何を子どもたちに伝えたいかを出していき少しずつテーマを固めていくことが出来ました。テーマを決めたあとの内容を考える時は自分の意見をみんな言っていざ山の案が出たけれど、それをなかなかまとめることが出来ず、相手の意見をなかなか聞き入れなかったり話し合いをしようとしなかったりとぶつかり合うこともありました。それでも、時間が経つにつれ周りとの遅れを感じ、みんなで協力して作り上げていくことが出来、その達成感を少しずつみんなで感じ合うことが出来ました。また、今年はオンラインでの発表ということで、カメラや配置などの構成も考え無ければならず、準備がとても大変だったけれど、作業を分担して協力し形にすることが出来ました。

本番では子どもたちとの画面越しではあったがやり取りを通して、「かわいい」「美味しそう」などの素直な反応を感じる事が出来、またそれに私たちが答えて楽しむことが出来たのでとても充実したものになったと感じます。

今回のこの経験で学んだ、周りとの協力し作り上げていく達成感や、子どもたちと一緒に楽しむことが出来る充実感をこれからの自分が職に就いた時の現場などで活かしていくことが出来るといいなと思いました。みんなと出来て良かったです。ありがとうございました。

【塩崎 恭大】

遊びと表現発表会を終えて、初めてのネットを使った劇を行い表現の仕方や工夫することの難しさを体感することかてきた。映像での劇であるので小さなものが見せ方や声の張り方などに工夫がいることに気づくことかてきた。小さなものは大きくわかりやすい色で子どもたちが認識できるよう作成し、声の張り方には強弱やトーンの高低差等のはっきりとした発声を心かけることかてきたのでよかった。映像を使った劇であるためシーンの切り替えやシーンごとに変わるステーションの風景などにも気を使うことか多く、風景では緑を多く使い自然の豊かさや華やかさを表現したりケーキ屋のシーンでは明るい色を使い照明で白飛びをしないよう気をつけて作成するなどの工夫をし無事劇を終えることかてきた。ケーキを実物を使い、劇中にカメラの前まで持っていく分わかりやすく見せてイメージしてもらい自分であつたらとどのようなケーキを作るのか、とどのようなケーキかてきのかなとの想像力を促すことかて来たのでよかった。

【糸山 憲汰郎】

遊びと表現をやってみて、課題が見つかった。1番の課題は計画性だ。私たちの班はあまり練習をすることがなく本番を迎えたため立ち位置やセリフなどが曖昧になりボロが出てしまった。予め練習をする時間を作っていればこのような事は起きずによりいい作品ができたと思う。自分の課題としてもいい役を貰ったにもかかわらずセリフはあまり覚えていなくて、振り付けや表現方法も上手く出来ずに終わってしまった。本番でも少しトラブルがあり、もしものことまで考えていないことがダメだと感じた。

だが、班のみんなで作品を創り上げていく中でたくさんの気づきを得た。まずは指揮を執る人（リーダーシップ）の重要さだ。造形物や小物を作る際に何をしたらいいのかなど話し合いではあまり決まらなかったことがあり、指示ができる人がいればより効率よく進んだと思う。他人任せではなく、自分が周りに発言できるような力を身につけるべきだと感じた。あとは、一人でやるのではなく、協力することによってよりいい関係作りができ、アイデアなども生まれるため1人でやるものでは無いと思った。班のみんながいたからこそ、今回の作品ができて、やるのが楽しかったと思う。本当に最高の友達とできて良かったと感じた。お疲れ様でした。

【井上 鈴奈】

遊びと表現発表会では私はいつも関わったことの無いクラスと一緒にすることになりました。初めは大丈夫かなと不安でしたか練習を重ねて行くたびみんなと仲良くなり協力することが出来ました。テーマを決める時にはみんなで意見を出し合いみんなの意見をまとめる事がとても難しかったと思います。また、私たちが森のレストランをイメージして劇を行ったので動物が出て来て耳などを作りました。私が衣装担当だったので私だけが耳などを作るのではなく、みんなで作るというような形にしてくれたりと、みんなで協力してすることが多く一人一人の負担が少なかったなと思いました。本番では軽いトラブルもありましたが、何とか最後までやりきることが出来ました。子どもたちも答えてくれたりと画面の中で会話ができ、

楽しんでくれている様子が見られとても嬉しかったです。このグループみんなだから楽しくできたなと思いました。このグループで良かったです。

【池末 留奈】

この幼教こども劇場を通して思ったことは、子どもたちに伝えたいことを表現する難しさを学びました。初めは、どんなことを子どもに伝えたいのか上手くまとめることが出来ず、話し合いが平行線になってました。しかし、途中から一人ひとりが特別な存在ということ伝えたいと決まってからはみんなで「こうしよう」「ああしよう」と沢山意見を出し合って決まって言ったので良かったです。台本も決まって、みんなで役割を分担しました。台本も先生方に見ていただきアドバイスをもらったので言葉の表現力を高めることが出来ました。そのあとは、台本を見ながらみんなで一通りの流れを通してお互いにアドバイスをしました。園児に呼びかける部分など、どのような言い方をすると反応しやすいかなど話し合って決めたりとても良かったです。衣装作りや背景作り、小物作りも大変でしたがみんなで協力して作ることが出来ました。

本番ギリギリで、まるまる台本を変えることになりとても焦りましたが、みんなが臨機応変に対応しアドリブでお互いが助けあって劇を無事に終わらせることが出来たので良かったです。このグループだったからこそ作ることが出来た劇だなと思いました。

【佐田 美怜】

遊びと表現発表会を通して私は、初めてコロナ禍や現代だからということもあり初めて画面越しに子どもたちに劇を披露した。

どのようにしたら画面越しでも子どもたちが喜んでくれるのか、子どもたちの楽しい表情、声など直接的には聞くことが私達に出来ないが本当に楽しんでもらえるのか不安だった。

また、劇を通して子どもたちにどのような表現をしたら伝わるのか言葉などをみんなで考え、工夫しながら作り上げた。私の中では、誕生日をテーマにした作品を作るにあたり、子どもたちに誕生日ってどんな感情が生まれるかな？などと考えるとてもいい時間になったと思った。

私にとっても、みんなで団結して作り上げた作品はとても思い出に残るものになった。

私自身のことだが、私は中々セリフなどをみんな以上に覚えることが出来ずに苦労していた。そんな中、私が困っていた時などには周りの友達などが「一緒に頑張ろうや」、私が出る番になると「ここ出番だよ」と教えてくれていて、私は非常に助かった。私の中では、みんなの足を引っ張ったらいけないとばかり思っていた。だが、みんなについて行きたいと思うようになり、私もみんなの姿を見て沢山のことを学び、沢山の経験や、沢山の体験が出来たと思っている。みんなで作り上げた思い出は一生の宝になったと私は感じた。とても楽しい時間を共にしてくれた友達(仲間)には本当に感謝でいっぱい。